

多様な子供たちを包摂するこれからの特別支援教育の在り方 ～校内研究の在り方の見直しを通して～



宮川 明、内藤 理子、金子 辰則（長崎大学教育学部附属特別支援学校）
鈴木 保巳、高橋 甲介、石川 衣紀、荻布 優子、下田 渚（長崎大学教育学部）

研究の背景と目的

次期学習指導要領の改訂に向けた国の動向

- 多様な実態の子供を包摂する教育の在り方
- カリキュラム・マネジメントの一層の充実
- その実施に伴う教員の負担感軽減 など

校内研究に関する課題

- 研究部への依存度が高い研究
- 情報発信の不足
- 研究成果が継承されにくい研究 など

「子供と教師一人一人の個性が光る・生きる」校内研究（教育実践）であるために…

- 実態の多様な子供を包摂するための教育実践研究 → 教育現場の実態や課題に即した複数のサブテーマ
- 自身の研究課題に主体的に取り組める研究 → 教師の主体性を生かしたグループでの研究
- 教育実践から学べる「仮説生成型」の研究 → 「実践⇒まとめ(成果と課題)⇒仮説⇒実践」のループ
- 教育実践の充実に図るために必要な体制の整理 → “カリ・マネ”の再整備による負担感の軽減

研究の経過1 「仮説生成型」のテーマ別グループ研究の取組

発表Ⅱ

ICT 機器の活用

発表Ⅲ

自立活動の充実

発表Ⅳ

キャリア教育の充実

発表Ⅴ

実態の多様な
集団の授業作り

発表Ⅵ

地域との連携、
地域資源の活用

成果

- ◎主題（多様な子供たちの教育の在り方）について、多角的な視点から実践研究に取り組める
- ◎各自が必要と感じる研修課題に積極的に取り組める（職員の自主性がアップ）
- ◎学部を越えた“縦”の議論が充実（校内における諸課題に対する議論の活発化）
- ◎「まずはやってみよう！」から始まる、チャレンジ的な実践の充実（柔軟な発想の増加）

課題

- 少人数では議論が深まりにくい ⇒ 全体で経過や成果を議論する場を設定
- 個人研究にせず研究成果を“全体化”する工夫が必要 ⇒ 研究成果を共有する場を設定
- 研究を進めるのが苦手な職員もいる ⇒ 大学との連携の強化、共同研究
- 少人数での作業になり、個人の時間的負担は増加傾向 ⇒ 時間の確保は必要（研究の経過2）

研究の経過2 本校のカリキュラム・マネジメントの課題整理

○本校のカリキュラム・マネジメントに対して職員が感じる負担感の調査

※ ①業務量が多い ②心理的対抗がある ③定義、目的が不明瞭 ④協働性の難しさ ⑤その他 ⑥負担感なし

	①	②	③	④	⑤	⑥	負担感率
年間指導計画表の作成、評価に関する項目	0	1	2	4	2	6	54 %
個別の教育支援計画の作成、評価に関する項目	0	1	1	0	2	9	18 %
個別の指導計画の作成、評価(教科)に関する項目	1	2	4	2	3	6	60 %
個別の指導計画の作成、評価(自立活動)に関する項目	1	0	2	5	4	4	67 %
単元計画の作成、評価に関する項目	5	3	9	1	2	1	95 %
日々の授業の実施と評価に関する項目	3	1	0	2	3	8	43 %

※ 負担感率…負担を感じる人（①～④の合計）÷項目の回答者数(⑤その他を除く)×100 (人)

<見えてきた課題>

職員への説明不足

個に依存傾向の体制

業務量と時間の不均衡

様式の検討や支援体制の再整備などが必要

知的障害特別支援学校児童生徒の発達段階を踏まえた ICT 機器の活用について

金子 辰則、寺崎 真季子、高野 歩実、假屋 健太（長崎大学教育学部附属特別支援学校）
下田 渚（長崎大学教育学部）

Ⅰ 研究の背景

本校では、知的障害の程度がさまざまな児童生徒全員に一人一台端末を整備し、学習やコミュニケーションに活用している。しかし、教員間の話し合いから、

○児童生徒の障害の程度や ICT 経験の差への対応が難しいこと

○教員の ICT スキルに不安があることなどの課題が明らかになった。

一方で、障害の程度に関わらず子どもが ICT を活用できるようにしたい、表現やコミュニケーションの力を伸ばしたい、既存の取組を発展させたいという前向きな意見も共有された。そこで本研究では、

- ① 児童生徒と教員の ICT 活用の実態を把握し、課題を整理すること、
- ② 一つの学級で発達段階に応じた ICT 活用の実践を行い、小・中・高等部が連携して児童生徒に合った使い方や系統的な指導方法を検討すること、の 2 点に取り組む。

Ⅱ 研究方法

○実態把握

- ・児童生徒の ICT 活用に関する実態把握（操作量、活用経験等）
- ・全教員 ICT 使用状況やスキルの実態把握（課題や悩みの整理）

(1) 教員研修

- ・附属学校園での ICT 活用事例や、県内外の動向・先行研究を収集し、実践や教員研修に活用する。

(2) 学級での実践

- ・多様な実態をもつ学習集団を対象に、児童生徒の発達段階に応じた端末活用（学習の振り返りやコミュニケーション等）を検討する。
- ・小学部から高等部までの系統的な活用方法やツールについても検討する。

Ⅲ 研究の経過と今後の展望

- ・(1) 教員研修については、県内の ICT 活用チェックリストの情報を収集し、本校においても同様のチェックリストを実施予定。その結果を集約し、困り感や悩み等を明確にし、来年度研修等を実施したいと考えている。
- ・(2) 学級での実践について、実践対象学級は、小中高の連携を考えて中学部（主に chromebook を使用）から選定することとし、1 学期に中学部全生徒を対象とした実態把握 (Fig.1) を行った。(chromebook ミッションズを活用) その結果、在籍生徒の実態が様々な「中学部 1 年生 (6 名)」(Fig.2) で実践を行うこととした。小中高の系統的な実践は、来年度実施予定であるため、今回は、中学部 1 年生で現在実践している以下の 4 つを紹介する。

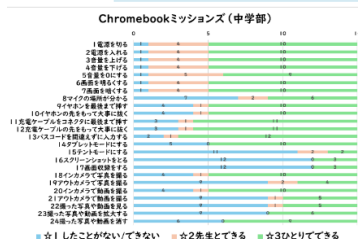


Fig.1 中学部全体の機器操作技能(結果)

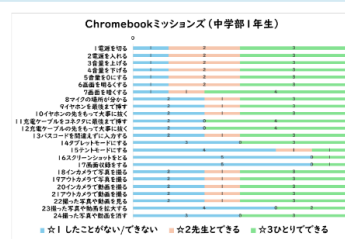


Fig.2 中学部 1 年生の機器操作技能(結果)

実践 A 朝の会での司会進行

対象生徒の実態: 発語がなく、言葉で相手とコミュニケーションをとることが難しいが、発声はあり、簡単な指示を理解し、行動することができる。

実践内容: keynote を使用し支援を行う。スライドをタッチすると、iPad から音声が出る仕組みになっているため、教師の介入なしで朝の会を進行していくことを目指している。

今後の展望: 次のスライドに変える操作は教師が行っているため、アニメーションとリンクさせ、タップし音声が出ると自動でスライドが次になるなど、生徒のみで進行できるようにシステムを改良していきたい。



実践 B 一日の振り返り(写真と選択)

対象生徒の実態: 少し時間が経つと、物事を自分の言葉で表現することが難しいが、活動後すぐであれば、楽しかったことや頑張ったことを簡単な言葉で伝えることができる。

実践内容: 写真とプルダウンを活用し、スライドで一日の振り返りを行う。写真を見ながら、その時のことを思いだしながら振り返ったり、選択肢の中から言葉を選んだりすることで、自分の考えを表現しやすくなるようにする。

今後の展望: プルダウンで選択した後、その横に自分の言葉で名前や教科等を書くことができるようになるなど、思考や操作に慣れてきたので、シートを改良し、より自分の言葉で振り返りができるようにしていきたい。



実践 C 一日の振り返り(文章の表現)

対象生徒の実態: 内容を自分の言葉で具体的に表現することが難しいが、楽しかったことや頑張ったことなどは簡単な言葉であれば、表現することはできる。

実践内容: 「いつ」や「どこで」など 5W1H の形を活用しながら Google フォームで一日の振り返りを行う。フォームの質問項目の中で、5W1H の形を必須入力にすることで、正しい文章の形や具体的な表現を意識できるようにする。

今後の展望: 文章を正しく伝えるために、どのような順序で話すと伝わりやすいかを学習するために、①入力した言葉を自分で入れ替えたり操作したりできる②自分自身で文章を正しく表現したり具体性をだしたりできるようなシートを作っていく。



実践 D 朝の会での給食メニューの確認

対象生徒の実態: 自分の調べたいものを検索し、それを保存したりスライドに張り付けたりすることが難しいが、簡単なローマ字打ちはマスターしている。

実践内容: クラスルームを活用し、自分のクラスに毎日課題（給食のスライド作り）が配布されるようにする。クラスでの日常生活の指導だけではなく、教科等の学習とも連携を図りながら、基本的なパソコン操作方法を身に付けられるようにする。また、毎日朝の会で給食のメニューを発表する役割を持たせ、プレゼンテーション能力の向上も図る。

今後の展望: 給食のスライドづくり、発表共にかなりスムーズに取り組めるようになってきたので、今後は学部集会等でプレゼン資料を作成・発表をするなど、大きな集団でも実践できるようにしていきたい。





子供一人一人の学びと生活を支える自立活動の指導の充実

～チームで捉える行動の背景と指導の方向性～

内藤 理子、宮崎 美緒子、修行 莉央、八重石 憲佑（長崎大学教育学部附属特別支援学校）

荻布優子（長崎大学教育学部）

1 研究の背景

- ・対象児童生徒の増加と実態の多様化による自立活動の重要性の高まり
- ・自立活動の指導に関する教員の専門性向上につながる校内システムの構築の必要性

2 研究の方法

- ①事例検討
児童生徒についての、客観的な実態把握と背景要因の的確な把握を行い、自立活動の指導の方向性を検討。
- ②自立活動に関わる校内システムの検討

3 研究の経過

【教師①時間における指導に関する事例検討】

対象児童：小学部 X 年 A 児（ダウン症）

(1) 当初の指導の方向性

- ・日々の実態把握や前年度の引継ぎ事項、今年度の保護者の願いを考慮し、「健康の保持」（口唇閉鎖に関すること）及び「身体の動き」（体幹の保持）に関する指導目標を設定した。

(2) 検討前の教師の困り感

- ・健康の保持や身体の動き、心理的な安定やコミュニケーションなど、課題が多岐にわたっており、課題を抽出する段階でつまづきを感じた。また、**優先すべき課題の精選の難しさ**を感じた。
- ・課題関連図を作成する際、課題間の関連が難しい場合があった。

【教師②教育活動全体の指導に関する事例検討】

対象生徒：中学部 Y 年 B 児（自閉症スペクトラム）

(1) 当初の指導の方向性

- ・日々の実態把握や前年度の引継ぎ事項を考慮し、「環境の把握」（場面の一部と全体の捉え方）及び「心理的な安定」（状況に応じた行動）に関する指導目標を設定した。

(2) 検討前の教師の困り感

- ・中心課題の一つ「環境の把握」は、**障害特性と深く関連**しており、**改善することの難しさ**を感じ、再度、課題関連図を作成したいと考えた。その際、**他の職員から意見を伺って**参考にしたいとも考えた。
- ・設定した指導目標を基に、前期に指導実践してみたが、課題を改善できているのか確信が持てなかった。

夏休み期間中に、大学職員、本研究グループ（教師①、教師②、高等部職員）の4名で事例検討会を実施。



(3) 検討会で話題が上がったこと

中心課題の設定

- ・口唇閉鎖や姿勢の保持など、障害特性による困難さは根本的な解決が難しいため、中心課題にはしづらい。
- ・**将来を見据えたときに、「心理的な安定」（困った場面などで自分から助けを求めることが難しい。）など、優先すべき課題は他にあるのではないか。**

指導場面の整理

- ・口唇閉鎖については、**給食指導（日常生活の指導）**の中で取り組むなど、指導場面の整理をするというのではないか。

(3) 検討会で話題が上がったこと

中心課題の設定

- ・障害特性による困難さは根本的な解決が難しいため**中心課題にはしづらい。**
→**配慮事項として見える化し、指導計画を作成するときに活用する**というのでは。

背景要因の分析

- ・状況に応じた行動が難しい背景に、**言葉の意味を十分に理解することや状況の理解が難しい**ことが考えられる。そのため、言葉の意味を多面的に捉えることや、説明を聞いて状況を知ることが必要だと考えた。

(4) 事例検討での気づきや成果

客観性の担保

- ・生徒の実態や課題の関連について**他者の視点からの気づき**
- ・複数の視点からの検討により、**客観的な指導計画**を作成できる

行動の背景の理解

- ・中心課題の**背景要因の的確な把握**につながる
- ・障害特性と実際に生じている困難さとの関連の整理→**具体的な指導内容の設定**につながる

将来を見据えて⇄今を見つめて

- ・**将来的な本人の姿**を見据えた課題の精選
- ・障害特性や発達段階を踏まえた**ボトムアップの視点**の大切さ

教師の困り感の解消

- ・指導への確信が持てないという**不安感の解消**
- ・実態把握、指導方法の選定など**専門性の向上**につながる

4 今後の展望

現在、事例検討での気づきや成果を踏まえて各学級で指導を行っている。今後は、指導実践とその検証を通じて、児童生徒の実態や指導について複数名で検討することの効果と課題を整理するとともに、指導に当たる上での教師側のつまづきやそれに応じるための教師への必要な支援を明らかにする必要がある。その上で、校内での組織的な専門性の向上を実現するシステムの構築を目指すために、複数名で**検討する場の設定**や自立活動の指導に関する**様式や作成スケジュール**などについての検討を進めていきたい。

子供も教師も一人一人の個性が光る・生きる教育実践を目指してIV

地域とともにある附属特別支援学校を目指して ～地域における学びの実践を通して、成果と課題の整理～



稲垣 和宏、池田 麻希、國知出 幸美、坂本 彩（長崎大学教育学部附属特別支援学校）
石川 衣紀（長崎大学教育学部）

研究の背景と目的

【研究の背景】

- ・ 地域で子供が交流・協働する体験活動やキャリア教育・職業教育など、自らとは異なる立場や地域にいる人々と接する機会や異なる環境に身を置く機会を持つことが重要である
- ・ コロナ禍によりその機会が減少した様々な体験活動は、自己肯定感や協調性、主観的幸福感など、ウェルビーイングの向上へ導くものである
- ・ 体験を通して他者と協働することにより共生社会の実現にもつながる
- ・ 特別支援学校における「地域」の捉えは、小・中学校のように明確に定めることが難しく、居住地や通学範囲の広範さや多様さから、どこまでを「地域」と捉えるのかという難しさがある。

【目的】

本校では、小学部では長崎の人や物などの様々なリソースを、高等部では学校周辺の住民、町内会、商店街など徒歩で交流が図れる範囲を、それぞれ「地域」として設定した。これをもとに、双方の「地域」における学びの実践を通して、地域とともにある附属特別支援学校としての成果と課題の整理を目的とした。

研究方法

小学部と高等部の実践を通じた学習の後に、教師、児童生徒、地域の方の考えを聞き取りやアンケート調査を行い、成果と課題を整理する。

研究の経過（小学部）

地域と関わることで学習が充実するのではないかと考えられる内容を検討し、柳が丘地区の方と一緒に学習活動に取り組んだ。

4月 生活科「野菜を育てよう」
野菜の苗植えを行った。

7月 生活科「いろいろな遊び」
お楽しみ会を企画し、招待した。

9月 生活科「野菜を育てよう」
野菜の種や苗の植え付けを行った。



また会いたい
次はいつ来る？

上手ね

おもしろいね



ありがとう

名前覚えたよ

笑わせたいな



育てるの
楽しそうね

研究の経過（高等部）

4月：総合的な探究の時間「地域お助け隊」として、ニーズが異なる4つのグループから生徒が選択し、分かれて活動をスタートした。

④ もいやりお掃除軍団



住吉中国商店街

② からサポート



⑦ くすくすスマイル



柳谷町

⑦ んけん GOGO! 隊



5月
話し合い、調査活動、準備
(課題解決のための
方法を考える)

6月
「地域お助け隊」
実践①→振り返り

9月
話し合い、調査活動、準備
(参加者のアンケートから
次のニーズを考える)

10月
「地域お助け隊」
実践②→振り返り

※実践③は1
月を予定して
いる

アンケートでいただいた声

- ・ 地域に貢献できた
- ・ 生徒の取り組む姿勢に感動した
- ・ また協力したい
- ・ 次の実践で取り組みたいことの提案



- ・ 提案いただいた内容から、通学路の手すりのペンキ塗りをした
- ・ 学校を知りたいという意見から、学校に招待して学校探検を行った
- ・ まだ実践していないが、実践③に向けて話し合いを始めた
- ・ 地域の方から称賛されることで、生徒の自己肯定感が高まった
- ・ グループだけで実践することが難しい規模の提案があった
- ・ アンケートの活用の仕方も今後の課題である

成果と課題

小学部は、今年度試行的に取り組んでいる。地域との交流で学習成果があったのかを検証し、次年度の教育課程に生かせるのかを考えていきたい。
高等部は、探究活動の一環として地域の方と交流をしながら学ぶことができた。実践を通して、生涯に渡り地域社会と関わり、地域とともに暮らす態度を身に付けるための指導内容について検討をする必要がある。



三浦 由香子、荒川 皓基、石塚 大夢、山田 恵美、篠原 裕美（長崎大学教育学部附属特別支援学校）
鈴木 保巳（長崎大学教育学部）

研究の背景

- ・R6 から全学部でセルフサポートブック（SSB）をキャリア・パスポートとして活用（勘田ら、2025）
- ・キャリア発達支援の促進
- ・多様な障害実態の児童生徒への対応が課題

研究の目的

- ・障害の重い子供も十分に活用できるように、SSB シートの作成過程の工夫

研究方法

対象

本校に在籍する児童生徒15名
小学部3組5名、中学部1～3年7名
高等部1・3年3名

SSB 活用期間・場面

2025年7月～9月の「特活」「進路」などで作成

SSB 工夫シート

学期目標の設定と振り返りの場面で、自己理解を高めるようなSSBシートの工夫

SSB シートの工夫等による研究の成果

小学部 〇年生△学期に頑張ることシート

～SSB シートの工夫～（図1）

工夫と実践	成果
頑張リシール欄の追加	○児童の継続した目標意識 ○教師が目標を常に意識した指導
A4サイズ1枚とする	○僅かなスペースでも掲示が可能 ○児童も教師も目標を適宜再確認

～学期途中の目標の振り返り方～

工夫と実践	成果
月に1回目標の振り返り	○教師、友達、家族からの称賛による意欲向上
写真や動画の撮影/提示	○自分や友達の頑張りに注目 ○表情や言葉での思いの表出増加

中学部 〇年生△学期に頑張ることシート

～SSB シート工夫①～（図2）

工夫と実践	成果
できたらシールシートを活用	○途中経過を視覚的に捉えられる ○達成感を適宜味わうことが可能
学期内は掲示して保管	○生徒も教師も目標を適宜再確認
進路の目標例をイラストで提示	○イラストをよく見て、自己選択する生徒が増加

～実態別での指導の工夫～

工夫と実践	成果
小段階と中段階に分かれて目標設定を実施	○小段階グループで個別指導可能 ○実態に応じた適切な目標を自分で決定する場面が増加

高等部 高等部〇年生で頑張る目標シート

～SSB シート工夫～（図3）

工夫と実践	成果
シートの中央に本人の顔写真	○目標設定や振り返りの際に自分のこととして捉える（よく見る）
目標（学習・生活）の数は自由	○本人のペースで無理なく、長期的に挑戦可能

～目標設定方法の工夫～

工夫と実践	成果
イラストから選択	○イラストをよく見て、頑張りたいことを自己選択

～学期途中の目標の振り返り方の工夫～

工夫と実践	成果
頑張っている様子の写真を貼る	○自分の頑張りに気付く ○様子を言葉や身振りで伝える



【課題】小学部1、2段階程度を主に履修する児童生徒にとって、目標設定場面で自己理解を高めることは難しかった。

【成果】月に1回程度目標を振り返ることで、自分の頑張リなどに気付き、挑戦して取り組もうとする意欲が向上した。

【今後の展望】自己理解の向上に向けた、学期途中での目標の振り返り方などについての更なる工夫が必要。

子供も教師も一人一人の個性が光る・生きる教育実践を目指してVI

児童生徒一人一人が見通しをもって意欲的に取り組むことができる授業づくり ～自信につなげる自己選択・自己決定支援～



森美紗樹、山中祐造、納所健一、小原芳恵、板羽絵理、勘田陽子（長崎大学教育学部附属特別支援学校）

高橋 甲介（長崎大学教育学部）

研究の背景と目的

飛坂ら(2022)によると、若手教員への聞き取り調査から、特別支援学校（知的障害）において一斉指導の難しさに課題が生じていることが分かった。本校においても近年、同様の課題が生じていることから昨年までの研究を踏まえつつ、実態差があっても児童生徒が意欲的に取り組むことができる授業づくりを検討することとした。校内での議論や先行研究から「自己選択・自己決定」をキーワードとし、授業の中で意図的にこのような場面設定をし、その効果・検証を行うこととした。

研究の方法

(1)対象児童:A 特別支援学校児童2名(1段階・2段階)

(2)時期、指導場面:202X年9月 生活科「風であそぼう」(全2時間)



①紙吹雪ゾーン



②アニマルゾーン



③お祭りゾーン



④ハウスゾーン

(3)自己選択・自己決定場面の設定

小学部1段階を学ぶ児童が風を体感して風に関心をもつことをねらい①④のゾーンを設定した。また、2段階を学ぶ児童が風の力や働きに気付くことをねらい②③のゾーンを設定した。

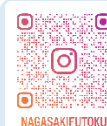
結果と考察

A児は、1時間目に教師の手本を見たり、一緒に遊び方を確認したりしたことで、いろいろな遊びに興味を示して取り組む様子が見られた。初めは風を感じる遊びが多かったが、次第に自分で風を起こして物を動かしたり、風の強さで物の動きが変化することに興味を示したりする様子が見られた。

B児は、1時間目は風に興味を示さなかったが、教師と一緒に遊ぶ活動を繰り返し行ったことで、次時には自分が好きな遊びに対して、自ら手を伸ばしたり、風の動きを見たりする様子が見られた。また、友達や教師を好きな遊びに誘う様子も見られた。

今後の課題

今回、小学部の一授業を取り上げたが、自己選択・自己決定の有効性についての検証はまだ十分に行うことができていない。他学部でも同様の授業に取り組み効果検証を行う必要がある。



本校の
Instagram